


特別展評価シート(1/3)

施設名	大阪歴史博物館	展覧会名	新淀川100年 水都大阪と淀川
-----	---------	------	-----------------

概要・実績	目的	<p>「新淀川」の開削に代表される淀川改良工事が終了して100年になることを機に、都市大阪の形成と発展とは切っても切れない関係にある「淀川」について、その歴史的な変遷を検証しながら、人びとの生産・流通・消費(娯楽も含む)の場であった川と周辺住民との関わりを広く市民とともに共有化し、今後の淀川と人びととの豊かな関係を構築する手がかりを得ることを目的とする。</p>					
	会期	平成22年9月18日～11月15日		会期 51日			
	主催	大阪歴史博物館					
	共催・後援	後援:国土交通省淀川河川事務所、NHK大阪放送局 協力:京阪電気鉄道株式会社 特別協力:淀川資料館、大阪市建設局					
	協賛・助成	助成:河川環境管理財団(河川整備基金)					
	観覧料	大人600円、高大生400円	無料対象者	中学生以下および市内在住65歳以上			
	観覧者総数	27,374人	有料入場	5,290人	(19.3%)		
	作品件数	187件	うち、借用	138件			
	関連事業	展示解説(6回)、シンポジウム(2回)、プレ講座(2回)、ワークショップ(2回)、現地見学会(5回)、映像上映会(2回) 地域連携講座(7区)					
	企画・実施	担当者:八木滋・大澤研一、担当課長:積山洋					
成果	住民に身近な地域の歴史をテーマにした展示として、調査研究にもとづき、初公開資料や他の河川との比較も含め、諸機関との連携により淀川を多面的に紹介することができた。また豊富な関連事業の実施や図録の刊行など総合的に充実した企画となった。今後に向け調査研究成果や「淀川歴史マップ」などの「資産」も蓄積できた。入館者数は目標を超え、来場者の関心も高かったが、とりわけ市内高齢者など地元市民の観覧が多く、淀川や河川と人びとの生活の歴史に関する市民の理解が深まった。						
補足事項	淀川流域への浸透や展示をよりよく理解してもらうために地元での広報や現地見学会・地域連携講座・出張展示などの事業に力を入れた。またオリジナルグッズを製作し、来場者へのサービスにも努めた。今回蓄積できた「資産」や連携の成果、ノウハウなどを今後も活用・継続し、発展させていくことが重要である。一方、展示内容をわかりやすく伝える手法を工夫することや、効果的な広報展開をしていくことが課題である。						

特別展評価シート (2/3)

施設名		大阪歴史博物館		展覧会名		新淀川100年 水都大阪と淀川			
定量評価	入場者数	25,000人	15,314千円	4,100千円	19,414千円	5,825千円	1,215千円	7,040千円	900冊
	実績	27,374人	12,500千円	4,100千円	16,600千円	2,899千円	1,542千円	4,441千円	1,095冊
	達成率	109.5%	81.6%	100.0%	85.5%	49.8%	126.9%	63.1%	121.7%
定性評価	実績・伝統の継承と新たな魅力創出 (外部評価)	評価点	<p>・館が収蔵している資料、過去の展覧会の成果及び展覧会の開催に先立って実施した2年間に及ぶ調査研究の成果をもとに、都市大阪の形成・発展と淀川の歴史を、自主企画展として開催したことを評価したい。現在、我が国の博物館では、新たな調査研究を実施し、その成果をもとにした展覧会の開催が次第に困難になっており、これまでの館の活動を継続しつつ、都市大阪の形成・発展と淀川の歴史を、他の河川改修との比較も含めて展示したことは、歴史系博物館の基本姿勢として評価したい。人口移動が激しいことや歴史教育が十分でない状況を考えれば、市民にとって身近ではあるが、正確な知識が十分とは言えない淀川の成り立ちや近現代史に注目したことは、「地域性」に力点を置く公立の博物館らしい活動と考える。</p> <p>・調査研究の成果を、展覧会の他に、シンポジウムの開催や報告書の刊行などさまざまな方法で公表していることは評価できる。</p> <p>・調査研究や展覧会の開催を通じて、資料や博物館運営の経験(「淀川歴史マップ」を含む)やノウハウ等を得ることができ、今後の博物館事業に活用可能な資産としたことは評価できる。</p>						
	改善点	<p>・展示資料の種類と量の多さに比べ展覧会場の面積が狭く、一部の展示ケースでは展示資料が詰め込まれているという印象を受けた。また、小さな字や図が多い資料が、展示ケースの奥に配置され、会場にいながら、資料を見ることができない場面もあった。展示資料の数を絞り込むとともに、資料の配置場所、補助的な手段の活用等も含め、資料をじっくり見せる工夫が必要である。調査研究や資料を発掘した者は、「できるだけ多く展示したい」という気持ちになると思われるので、館の中に展示を統括する担当者を配置し、両者の調整により、展示の質を高めることも検討してほしい。</p> <p>・高齢者が増加する中で、地域のことに知識と関心のある歴史展示の常連と呼ぶべき層(男性・高齢者等)の入館者数は、目標数以上に増加させることができた。一方、地域についての理解と関心を深めることにより、明日の地域の担い手になることが期待される若い世代へのアプローチは現状では十分とは言えない。この展覧会には、小中学校の児童生徒にも是非知ってもらいたい内容や教科学習に活用できる内容も多数あると思われるので、今後、今回の展覧会で得られた資産を児童生徒向けに活用する方法を検討してほしい。</p>							
評価	さまざまな来館者への対応 (外部評価)	評価点	<p>・地域住民が参加して、地域の文化資源を発掘した事業(「淀川歴史マップ」)や「キッズ・チャレンジシート」を作成するなど、幅広い層に来館してもらうための工夫を行ったことを評価したい。</p> <p>・会場内で観客から寄せられた質問等に対して、現場スタッフと学芸員との連絡がスムーズに行われるなど適切に対応ができていた。</p>						
		改善点	<p>・子どもの関心を高めるためには、ワークシートの作成の他に、こどもの興味関心に十分カスタマイズされたものを積極的に提示することが望まれる。学校での利用を促進するのであれば、学校関係者と十分連携して、コンテンツをつくることが望</p> <p>・広報活動の充実とともに、主たるターゲットとして想定している層にアピールできるものをコンテンツとして十分用意しておくことが必要である。インターネットが定着した今日、観客は、何を見ることができののか、体験できるののかを事前に確認し、既に来館した人の感想などにより、行動決定をするようになりつつあり、これまでの広報手法では、思った程効果があがらなくなっていることを踏まえた対応が</p> <p>・高齢者が多かったこと、じっくり見る展示だったことを考えれば、展示場内に椅子をもっと配置してほしい。</p>						

特別展評価シート (3/3)

定 性	連携による 総合力の発 揮(外部評 価)	評価点	<ul style="list-style-type: none"> ・淀川流域や河川関係の機関・団体と連携することで、借用資料による展示の充実、多数の関連事業の開催や広い地域での広報の展開が実現できたことは、大いに評価したい。この事業を契機に、博物館協会に属する博物館相互の連携が本格的に始まったことも評価したい。今回構築できた連携関係や連携を進める上でのノウハウは、更に発展させることを期待したい。 ・展覧会に先立つ調査研究、シンポジウムの開催、史料集の作成に当たって、外部資金（410万円）を確保したことを評価したい。
	改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館と外部の連携を更に本格的なものにするのであれば、博物館側にノウハウを開発、蓄積していくことが重要になる。調査研究や展示を担当するスタッフの他に、連携を担当する部署、スタッフを置くことも今後検討してほしい。 	
評 価	ニーズに即 し効果的な 事業展開 (外部評価)	評価点	<ul style="list-style-type: none"> ・関連行事(展示解説を含む)の種類・回数を充実させ、オリジナルグッズを製作するなどして観覧者の多様なニーズに応えたとともに、その掘り起こしに努力したことは大いに評価したい。少ないスタッフが奮闘して様々な企画を実施しているが、今後、ある程度「選択と集中」を進めていくことも、継続できる体制をつくる上では避けて通れないと考える。 ・有料観覧者数・観覧料収入は目標を下回ったが、外部資金の獲得、経費の削減と好調な図録販売により欠損は生じさせなかった。
		改善点	<ul style="list-style-type: none"> 館が言及されているように、多様かつ多数の観覧者を得るためには、目標設定や広報・展示手法について、ニーズを把握し新たな戦略を立てる必要がある。期限を設定した上で、速やかに取り組むことを期待する。多くの博物館が多様な事業を展開しているので、他館との相違点と優位点が際立たせることがますます重要になっている。館の在り方を根本的に変えることも視野に入れて、取り組むことを期待する。

総 評 (外部評価)	評価点	<ul style="list-style-type: none"> ・数年に及ぶ調査研究の着実な実施と研究成果の展示への活用、今日的なテーマである地域社会の再生を、大阪市のシンボルである淀川に焦点をあてて取り組むこと、自主企画展を大事にしている姿勢には、中核的な機能を果たしている歴史系博物館にふさわしいものが見られた。 ・予定したよりも少ない予算で、目標の入館者数以上に入館者数を確保したことは評価したい。地域住民が参加して、地域の文化資源を発掘した事業（「淀川歴史マップ」）は、評価できる。今後も、地域の文化資源を地域住民とともに発掘する取り組みを継続してほしい。
	改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・入館者数は目標を達成したが、収入は目標額を下回っている。無料範囲の設定について今後十分検討するとともに、収入を確保する方法を多角的に検討してほしい。 ・大阪モノであることや館側では相応の努力をしたにもかかわらず、マスコミに取り上げられることが少なかった。マスコミとの共催展でない展覧会の広報戦略を再構築する必要がある。若い世代の来館を促進する上でも、ネット社会に普及しているツイッターやブログの活用方法を研究してほしい。 ・展示手法や学校連携、事業広報などの改善については、小手先の改良、部分的な改良にとどまらないように取り組んでほしい。 ・大阪は外部にステロタイプ化した像が流布する傾向があるので、大阪の歴史や文化をひろく発信する姿勢を今後も重視してほしい。